

一日じゅう
 巴御前の風は、
 あがっていたそうです。

43 巴御前の風は、一日じゅうよくあがっていたそうです。44 戦友たちは、作業の合間に、それを見上げては、楽しんでいました。
 45 国の子ともたちも、風をあげているだろうか。46 おぶへろは達者だろうか。47 じいさんの神経痛がいたまなければいいが……。
 48 風を見ながら、兵隊たちは、いろんなことを考えていたといっています。

● 書かれているなかみ（映像・感情・説明）

ここから、一行、空いている。なんらかの事件が起きることを予感させる。
 父の巴御前を見ていた戦友たちの思い。それは、吉野さんの思いでもあっただろう。戦友たちのだれもが、父の巴御前に、ふるさとを思っていたのだ。戦争に行くということは、こういうことだということもわかる。勇ましく戦っただけではない。だれもが、生身の人なのだ。それは、現在でも。

T さて、ここで一行空いているね。どうだろうかだろうか。
 C 何か、特別なことがあるんじゃない？
 C 話が変わるんだと思います。
 T 何かありそうだ。
 さて、最初の文、どっいいう文？

C 巴御前の風は、よくあがっていたそうです。
 C 風は、あがっていたそうです。

T 風のこと。今までかいてあった巴御前の風のことだ。それが、

C よくあがっていた。
 T よくあがった、ではなへて、よくあがっていた、だよ。
 C すっと、あがっていた。
 C すっと、上にあった。

C 風がよく吹いていたんだと思います。
 T そうだね。何しろ、上がっている時間が？
 C 一日中
 T 一日中なんだ。一日中、ずっとあがっていた。

C 途中で、落ちたりしないのかなあ。
 T すすいねえ。この辺では、考えられないなあ。それにして、
 C も、その間、お父さんは、風をもっていたのかな？

C もってない。
 C 何かにくっついてたんだと思う。
 T さすがに、持っているわけには行かない。だから、何かにくっついてたんだろね。それでも、一日中あがっていたんだ。まるで、端みいだねえ。

T では、次の文。だれがどうした？
 C 戦友たちは、楽しんでいました。
 C 戦友たちは、それを見上げては、楽しんでいました。
 T 戦友たちは、楽しんでたんだ。つまり、吉野さんも楽しんでた。

T 楽しんでた、のなかみは、ここではよくわからない。みんなが、楽しんでるのとは、ちょっとちがうみたいだから、

作業の合間に、
 それを見上げては、
 戦友たちは、
 楽しんでいました。

ては（連語）

「接続助詞」で「に係助詞」は「が付いたもの。上に来る語によっては「では」となる」

(1) ある事柄が実現した場合を仮定して、条件として示す。望ましくない事柄についていふことが多い。もて……ただひ。

「計画が敵に知られ、せつかへの苦心も水の泡だ」「この辺は危険ですから、泳いではいけません」

(2) すでに行われた事実を条件として示し、それから生ずる事柄を示す後件に結び付ける。…した、それでは。

「こんなにお世話になっ—申し訳ありません」「そっ—みもふたもな」

(3) 前件が成立すれば、必ず後件が成立するという場合、その前件を表す。…するときはいつも……。

「せい—事をしそんじる」「男も家族持ちになっ—、勝手気ままな生活を送ることはできな」

(4) 繰り返される動作・作用について、前件と後件とを結び。
 「寄せ—返す浜の白波」「うんでは起き、うんでは起きて…」

*本文は、(4)。くりかえし、風を見上げて、楽しんでいたことがわかる。ただ、その楽しみは、「楽しい」というものでないのは、次の文でわかる。だれもが、父と同じ気持ちなのだ。

あいま【合間】

物事のときれた短い時間。ひま。「勉強の—」

45

国の

子どもたちも、た風をあげているだろうか。

くへ【国▽邦】

- (1) 一つの政府に治められている地域。国家。国土。「—を治める」
- (2) 地域。地方。「北の—」
- (3) 地方自治体に対して。中央政府。「—から県に管轄が移る」
- (4) 古代から近世に至る日本の行政単位の一。大化の改新の国郡制によって定められ、明治維新後郡県制に変更された。「武蔵の—」
- (5) 自分の生まれ育った所。故郷。郷里。「何年ぶりかで—に帰る」

46

おふくろは ——— 達者だろうか。

たっしゅ【達者】(名)

ある道をきわめた人。達人。「弓の—」

(形動)

- (1) ある事に熟達しているさま。上手であるさま。「英語が—だ」「口の—なやつ」「—な筆づかい」
- (2) 体の各部の働きが優れているさま。また、体が丈夫で健康であるさま。「年ほいつても目ほ—だ」「祖母ほ—にしておます」
- (3) 物事をするのにしたたかで抜け目のないさま。「その方面にかけは—な男」

47

しんけいの

神経痛

——— いたまなければいいが……。

しんけいしゅう【神経痛】

神経の分布領域に起こる発作性の痛み。骨変化や腫瘍しゆゆりによる神経繊維の圧迫が主因。坐骨神経痛・肋間神経痛・三叉さんさ神経痛などが多い。

後で考えてみよう。

さて、それを見上げては、になっている。

ア それを見上げては、楽しんでいた。

イ それを見上げて、楽しんでいた。

C イは、ただ、見上げて楽しむことだけど、……。

C 見上げては、だったら、何回もくりかえしている。

T そうだね。「〜しては」というのは、

おかしをつまんで、食べた。

おかしをつまんで、食べた。

というように使う。何度もくり返すときに使うんだ。

戦友たちが、そんなふうに使っていたのはいつ？

C 作業の合間に

T 作業をしていて、ちょっと暇がきたりするときのこと。

この場合、作業って、ということなんだらうね。

C 戦争の準備。

C 戦争に関すること。

T うん。戦争をするための作業だ。その合間に、風を見上げては、楽しんでいた。

では、楽しんでいた」のなかみだ。

T では、「楽しんでいた」のなかみだ。

次のちくちくの文を、続けて書いてある。

まずは、何がどうだったっ？

C 子どもたちも、風をあげているだろうか。

C 国の子どもたちのこと。

T 国の子どもって？

C 日本の子ども。

C 自分の田舎の子ども。

C 自分の子ども。

T この場合の国は、自分の出身地、ふるまひのことだよ。だから、この子どもたちは、

自分の子どもたち。

C 自分の子どもたち。

T そうだ。巴御前の風を見て、？

C うちの子も、風をあげているかなって思った。

T 自分の子どものことを思ったんだ。

T そして次の文は、？

C おふくろは、達者だろうか。

C お母さんは、元気かなと思った。

T そうだね。お母さんのことも思った。達者、というのは、

元気で健康だということ。そんなことも思った。

T そして、つぎは、？

C じいさんのこと

C じいさんの神経痛がいたまなければいいが。

T 今度は、じいさんのことだ。

C 神経痛って、わかるかなあ。

C ひいおばあちゃんがよく言っている。

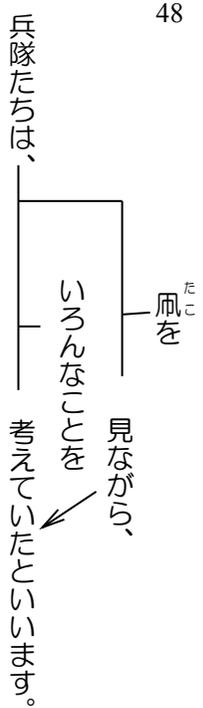
T そうか。年をとってくるとね、けがをしているわけでもな

いんだけど、身体の中、神経が痛くなったりする。それを、

神経痛というんだ。じいさんのことを思った人は、兵隊に来

る前、家でどうだったかというっ？

C おじいさんが、神経痛が痛いと言っていた。



- C おじいさんが、神経痛だった。
- T そういうことがあったんだね。
- C 最後が、「・・・」「よなっつんぬ。わかぬじやないか。」
- C ほかにもある。
- T そうだね。次の文にも書いてあるから、次を読んでもみよう。だれがどうだったっ?
- C 兵隊たちは、考えていた。
- C 兵隊たちは、いろんなことを考えていた。
- C 風を見ながら、考えていた。
- T 風を見ながら、「〜詩ながら」というのは、この前勉強をしたね。
- C 同時にやっているじや。
- C 風を見ているときに、いっしょに考えている。
- T そう、「見る」「と」考える「は」別のじやではなくて、同時なんだ。作業の合間に、風を見ながら、考えていたんだ。「・・・」はっ
- C いろんなじや。
- T ほかにも、いろいろあるんだね。でも、できていないのを見ると、どれも共通していることがあるぞ。
- C みんな家族のことを思っている。
- C 父も、家族のことを思っていた。
- T みんな、家族のことを考えていたんだね。とすると、最初が「風を見ては、楽しんでいました」というのは？みんなが楽しみたいのに、遊んでいたの？
- C 思い出していた。
- C 楽しんでいる感じがじゃない。
- T うん。考えていることは、楽しんでいる感じがじゃないねえ。ここで、みんなの頭に「天才を再生してほしい。考えていることは、声になっていないね。作業の合間に風を見上げてる、とんないことを言ったらしたんだらどうっ?
- C 天才めがっつぬなあ。
- T そんなさういふじや。風をよめてはっ
- C 落ちたじやない。
- C すじじやあ。
- ・・・
- T そうだね。実査に声に出していたのは、そういうことだろうねえ。「おぶらへは元気かなあ」なんて、作業の合間に言ったりはできなかったんだ。それは、考えていたじや。
- C でも、吉野さんは、そのことがわかっている。どうしてだねじや。
- C あとで聞いた。
- C 寝るときなんか話をしたんじゃないかな。
- T うん、作業の時は、そんな話ほできないかもしれないけど、あとで、そんな話をしたのかもしれないねえ。「あの風を見ているじやないか」といふことを思い出すなあ」とか言っつ、「国の子どもらも、たこあげてるかなあ」なんて話をしたんだらうね。だから、吉野さんも、知っているんだ。
- C じやあ、この文だけ、ほかとちがうことがあるんだじやあ。
- C っつ

T ほかは、「戦友たちは」になっているのに、「こは、」兵隊たちは」になっている。

C 戦友じゃない、ほかの兵隊たちも、同じだったんじゃない？

C ちがうグループもあったんだと思う。

T そうかもしれないな。グループのことを、部隊というんだけど、その部隊に隊長さんがいるんだけど、ほかの部隊が近くにいたのかもしれないね。

T さて、一行空気で始まったところだけど、今まで変わりなく？

C 平和な感じ。

C 戦争中じゃないみたい。

T そんな感じのままだね。

ほかにわかることはありますか？